

# 日本中東学会ニューズレター

**JAMES**  
NEWSLETTER



**No.136**  
2014/7/31

## 目 次

公開講演会の開催 .....	2
AFMA 大会開催のお知らせ .....	3
理事会・総会報告 .....	4
日本中東学会第 30 回年次大会報告 .....	11
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告 .....	30
寄贈図書 .....	31
会員の異動 .....	31
事務局より .....	33
編集後記 .....	33

## 公開講演会の開催

日本中東学会第20回公開講演会を下記の通り開催いたします。

「中東における『革命』の系譜：エジプトとイランの歴史をひもとく」

日時 2014年11月2日（日） 13：00－17：20（12：30開場）

会場 東京大学（本郷キャンパス）経済学研究科棟地下第1教室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

（会場は、大会・総会時の告知から変更になっています）

日本中東学会は、日本における中東研究の最先端の成果を広く社会に還元すること、また、それを通じて中東と中東研究（そして中東学会）への関心を喚起することを目的として、年に一回の公開講演会を開催してきました。広く全国各地を廻りながら、それぞれの地域の個性と響き合うテーマ設定を行うことを意識してきたのは、会員の皆さまご案内の通りです。とはいえ、首都圏も「全国各地」の立派な一つです。今年は、久しぶりに東京での開催を企画しました。

20回目の開催となる今年の公開講演会のテーマは「中東における『革命』の系譜」です。一時は中東における市民社会の活力を示すものとして注目を浴び、盛んに報道もされた「アラブの春」も、いつの間にかほとんど話題にならなくなってしまいました。むしろ、「アラブの春」の「失敗」は、中東に対する突き放したような見方—やはり中東には自生的な政治変革や社会変革は期待できないという見方—を強めてしまった感さえあります。2009年にイランで沸き起こった「緑の運動」も、イスラーム体制の強権的な姿勢を印象づけたという意味で、やはり同じようなイメージの形成に繋がってしまっているのではないのでしょうか。

このような状況を踏まえ、本公開講演会では、中東における下からの変革運動・抗議活動・抵抗運動の歴史をたどり、「『革命』の系譜」が同地域で見せてきた独自性や特徴を考えてみたいと思います。そのため、エジプトとイランという二つの地域大国を事例としてとりあげ、それぞれに関し2本ずつの講演を準備します。本講演会の目的は、「アラブの春」や「緑の運動」が成功であったか失敗であったかを、近視眼的に、かつ外からの見方にもとづいて問うことではありません。ここは一旦視野を広く持ち、中東の長い歴史に織り込まれた「『革命』の系譜」をたどってみましょう。「アラブの春」や「緑の運動」に対する私たちの視線も、そうすることでまた違ったものとなってくるのではないのでしょうか。

（なお、今年のテーマは、特に首都圏の個性と響き合うものだと考えて選択したものではありません。あらかじめお断りいたします。）

## プログラム

- 13:00-13:05 開会挨拶：栗田禎子（会長・千葉大学教授）  
13:10-13:50 長谷部史彦（会員・慶應義塾大学教授）「前近代エジプト都市における抵抗：その形態・作法・情理」  
13:55-14:35 長沢栄治（会員・東京大学教授）「近代エジプトにおける革命の系譜：2011年革命への道」  
14:35-14:55 休憩  
14:55-15:35 八尾師誠（会員・東京外国語大学教授）「イラン近現代史の展開と二つの革命」  
15:40-16:20 松永泰行（会員・東京外国語大学教授）「革命の改革、革命への抵抗：イラン革命と経路依存」  
16:20-16:30 休憩  
16:30-17:20 総括コメント（飯塚正人〔会員・東京外国語大学教授〕）、質疑・応答・討論

なお、プログラムの詳細については変更があり得ることをご了承ください。確定次第、学会ウェブサイトでお知らせします。

一般公開・無料

問い合わせ先 日本中東学会事務局

〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-3-1 聖心女子大学 山口昭彦研究室内

Tel: 03-3407-5685

e-mail: james@james1985.org

(森本一夫)

## AFMA 大会開催のお知らせ

アジア中東学会連合（AFMA）第10回大会（2014年12月13-14日、京都大学）の概要が決まりました！

アジア中東学会連合（AFMA）第10回大会”De/Re-constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the 20th Anniversary of the AFMA”（2014年12月13-14日、京都大学）へは、昨年より公募を受け付けてきましたが、最終的に4月上旬ですべての募集を締め切りました。

その結果、47件の報告希望が寄せられ、実行委員会で調整の上、最終的に16パネルにまとめられました。プログラムの詳細は、AFMA ホームページ

<http://mideast.site90.com/afma/10thProgramme.html>

をご覧ください。

(なお、パネルの時間帯、順番などは、今後も変更となる可能性があります。その都度ホームページ上でアップデートしますので、随時ご確認ください。)

また、基調報告者として、カイロ・アメリカン大学のネリー・ハンナ教授、テヘラン大学のサラ・シャリーアティ教授が来日招聘をお受けくださいました。その報告題も、上記ホームページ上のプログラムからご覧いただけます。

多くの会員の方々のご参加をお待ちしております。

(酒井啓子)

## 理事会・総会報告

### 【2014年度第1回理事会】

日時：2014年5月10日(土) 10:00-12:00

場所：東京国際大学第1キャンパス6号館618号室

出席：栗田禎子、赤堀雅幸、飯塚正人、粕谷元、小杉泰、酒井啓子、長沢栄治、林佳世子、保坂修司、松本弘、三浦徹、森本一夫、山口昭彦

欠席：臼杵陽、江川ひかり

〔議題〕(議題の詳細については、総会報告をご参照ください。)

1. 2013年度事業報告・2013年度決算報告を承認した。
2. 2014年度事業計画・2014年度予算案を承認した。
3. 2014年AFMA大会開催準備状況について報告があった。
4. WOCMES参加について各パネルへの補助を承認した。
5. 『日本中東学会年報(AJAMES)』第29号編集報告を受け、第30号編集計画を承認した。
6. 2014年度公開講演会の準備状況について報告があった。
7. 30周年記念事業(座談会)開催について報告があった。
8. 30周年記念事業(「30年の歩み」)実施を承認した。
9. 総会資料を確認した。
10. 会員動向について報告があった。

### 【日本中東学会第30回年次総会報告】

日時：2014年5月10日(土) 17:10-18:15

会場：東京国際大学第1キャンパス6号館

出席：当日出席者69名、委任状提出100名、計169名

(会員数676名、定足数5分の1の136名により、総会成立)

1. 司会および総会役員の選出

鈴木均会員の司会により、議長として桜井啓子会員、書記として奥美穂子、岩本佳子両会員、議事録署名人として秋葉淳、吉村慎太郎両会員を選出した。

## 2. 2013 年度事業報告および決算

第 15 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

### (1) 事業報告（報告：山口昭彦事務局長）

- a) 第 29 回年次大会を、2013 年 5 月 11 日～12 日に大阪大学豊中キャンパスにおいて開催した。
  - ・ 公開イベント第 1 部「シンポジウム 中東研究における言語教育を考える～学ぶ立場と教える立場」
  - ・ 公開イベント第 2 部「講談『アリババと四十人の盗賊』」
  - ・ 研究発表 8 部会 59 本、企画セッション 2 本。
  - ・ 韓国中東学会から KIM Joongkwan 会長、OH Eunkyung 事務局長を招待した。
- b) 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 29-1 号、第 29-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
  - ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)「国際情報発信強化(B)」を活用した。
  - ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
  - ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) 上で公開されるよう手配した。
- c) 第 19 回公開講演会「参詣と巡礼—日本と中東イスラーム世界」を 2013 年 10 月 27 日に愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会との共催により松山市の愛媛大学南加記念ホールにおいて開催した。
- d) ニュースレター和文 4 回 (総頁 84 頁) を発行した。第 131 号 (4/30、9 頁)、第 132 号 (7/28、年次大会特集、46 頁)、第 133 号 (12/8、20 頁)、第 134 号 (2014/2/13、9 頁)。
- e) 「日本における中東研究文献データベース 1989-2013」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- f) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- g) 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
- h) 第 22 回韓国中東学会 (KAMES) 国際大会が開催され、Beyond the New Paradigm in the Middle East: Political Affairs, Islamic Value and Multi Culture と題された同シンポジウムには、日本中東学会から会長と会員 7 名が参加した。
- i) 人間文化研究機構 (NIHU) プログラム・イスラーム地域研究主催による国際会議 New Horizons in Islamic Area Studies: Encounters, Reflections and Collaborations (2013 年 11 月 2-4

日、ラホール経営大学) に、理事1名を派遣し、現地研究機関などと交流を図った。派遣にあたり、上記科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「国際情報発信強化(B)」を活用した。

- j) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
- k) AFMA (アジア中東学会連合) 幹事学会として 2014 年 12 月 13-14 日に、De/Re-constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the 20th anniversary of the AFMA と題する国際会議を京都大学で開催することを決定し、発表者募集などの準備を進めた。
- l) 2014 年 8 月 18-22 日に中東工科大学(トルコ共和国アンカラ) で開催される第4回中東研究世界大会(The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-4) に、日本中東学会として4つのパネルを組むことを決定した。
- m) 2013-2014 年度会員名簿を刊行した。
- n) 第4回日本中東学会奨励賞を、貫井万里会員に授与した。
- o) 故片倉もとこ会員からの寄付金をもとに、既存の「学会奨励賞特別基金」のなかに「片倉もとこ研究奨励基金」を創設した。
- p) 学会事務局を、慶應義塾大学から聖心女子大学に移転した。
- q) 会員の増減: 2013 年度中には入会者 28 名、退会者 25 名(うち逝去による退会 2 名、会費滞納による退会 11 名、自主退会 12 名) の異動があった。その結果、2014 年 3 月 31 日現在の会員数は 676 名(正会員 531 名/うち海外在住 13 名; 学生会員 145 名/うち海外在住 6 名) となった。

(2) AJAMES 第 29-1 号、第 29-2 号編集報告(報告: 保坂修司編集委員長)

- ・ AJAMES 第 29-1 号、第 29-2 号がそれぞれ 2013 年 8 月と 2014 年 2 月に刊行された。
- ・ 29-1 号では、和文 15 本と欧文 9 本、29-2 号では、和文 7 本と欧文 6 本が採用となった。

(3) 2013 年度決算報告(報告: 山口昭彦事務局長)

- ・ 年会費の納入率が向上し、年会費収入が予算より 90 万円ほど増えた。
- ・ 事務局運営の効率化を進め、事務局費を抑制することができた。
- ・ AJAMES の欧文校閲費が予想を大きく下回るなどしたため、事業費全体として予算額より 150 万円ほど少なくなった。

(4) 監査報告(報告: 阿部克彦監事)

- ・ 2014 年 4 月 11 日に学会事務局(聖心女子大学)にて、2013 年度の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

<質疑応答>

- ・ 特になし

<採決> 以上の2013年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

### 3. 2014年度事業計画および予算

第15期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

#### (1) 2014年度事業計画（報告：山口昭彦事務局長）

- a) 第30回年次大会を2014年5月10～11日に、東京国際大学第1キャンパスにおいて開催する。
- b) 日本中東学会年報（AJAMES）第30-1号（2014年7月）、第30-2号（2015年1月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- c) 第20回公開講演会「中東における「革命」の系譜：エジプトとイランの歴史をひもとく」を、2014年11月2日に東京大学情報学環福武ラーニングシアターで開催する。
- d) ニュースレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行する。
- e) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース1989-2014」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- f) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- g) 海外の関連学会との交流を促進する。
  - ・ 第30回年次大会に、韓国中東学会から SEO Jeongmin 副会長を招待する。
  - ・ 2014年度韓国中東学会国際会議に、日本中東学会から会長や事務局長らが参加する。
  - ・ AFMA（アジア中東学会連合）幹事学会として2014年12月13-14日に、De/Re-constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the 20th Anniversary of the AFMA と題する国際会議を京都大学で開催する。開催にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表（C）」と京都大学教育研究振興財団の助成を受ける。
  - ・ 2014年8月18-22日に中東工科大学（トルコ共和国アンカラ）で開催される第4回中東研究世界大会（The Fourth World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-4）に、日本中東学会として4つのパネルを組む。
- h) 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- i) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- j) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東・イスラーム研究文献データベース1989-2014」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
- k) 30周年記念企画として座談会を開催し、その成果を冊子などの形で公開する。
- l) 第16期役員選挙を実施する。

(2) AJAMES 第 30-1 号、第 30-2 号編集計画、2014 年度編集体制（報告：保坂修司編集委員長）

- ・ 現在、30-1 号の刊行準備を進めており、7 月に刊行予定である。
- ・ 30-2 号は 2013 年 6 月 1 日に投稿を締め切り、2015 年 1 月に刊行予定である。
- ・ 2014 年度の編集体制として 1 名の編集委員の交代があった。
- ・ AJAMES 投稿規程を改訂し、執筆者名の匿名性を徹底することを検討中である。

(3) 2014 年度予算案（報告：山口昭彦事務局長）

- ・ 収入のうち、「科学研究費補助金研究成果公開促進費（研究成果公开发表 B）」（公開講演会開催用）と「科学研究費補助金国際情報発信強化（B）」はいずれも不採択となった。
- ・ AFMA 大会開催用の「科学研究費補助金研究成果公開促進費（研究成果公开发表 C）」が採択となった。
- ・ 支出のうち、事務局費を昨年度より 25 万円ほど削減した。
- ・ 事業費全体としては昨年度より 270 万円ほど増えているが、これは主に AFMA 大会開催費計上によるものである。
- ・ WOCMES での JAMES パネル開催のために申請していた国際交流基金の助成金が不採択となったため、学会予算より各パネル 10 万円の補助金を出すこととし、4 パネル分として合計 40 万円を計上した。
- ・ 30 周年企画として座談会開催を予定しており、準備費として 30 万円を計上した。

<質疑応答>

（質問）30 周年企画費 30 万円の中には、出版費も含まれているのか。

（飯塚正人担当理事）出席者の旅費やテープ起こし代などの必要経費を引いた上で、予算に余裕があれば、冊子での刊行もしたい。余裕がなければ、2015 年度に刊行することも検討している。

<採決> 以上の 2014 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

#### 4. その他

AFMA 関係（報告：酒井啓子担当理事）

- ・ 2014 年 12 月 13-4 日に京都大学で AFMA 大会を開催するが、16 パネルで、44-5 名程度の報告者を予定している。
- ・ 2014 年 8 月 18-22 日にトルコのアンカラで開催される WOCMES でも AFMA パネルを組む予定である。

#### 5. 会長挨拶（栗田禎子会長）

6. 議事終了につき議長の桜井啓子会員が降壇し、司会の鈴木均会員により閉会が宣言された。

（山口 昭彦）

## 2013 年度決算

## 本会計

収 入	13 年度予算	13 年度決算
<b>2012 年度よりの繰越金</b>	<b>10,999,297</b>	<b>10,999,297</b>
<b>年会費</b>	<b>4,424,200</b>	<b>5,302,000</b>
正・学生会員	4,424,200	5,302,000
2010 年度以前分	19,200	98,000
2011 年度分	66,250	95,000
2012 年度分	15,250	215,000
2013 年度分	994,500	1,530,000
2014 年度分	3,192,000	3,129,000
2015 年度以降分	0	235,000
賛助会員	0	0
<b>その他</b>	<b>3,750,500</b>	<b>3,886,270</b>
科研費国際情報発信強化	2,500,000	2,500,000
利子	500	808
AJAMES 販売代金	250,000	387,690
東洋文庫連携事業分担金	800,000	800,000
NII-ELS 著作権料	200,000	197,772
<b>収入合計</b>	<b>19,173,997</b>	<b>20,177,567</b>

(単位: 円)

2014 年度への繰越金	13,796,460
郵便振替口座	11,047,662
三井住友銀行口座	2,715,521
Paypal 口座	24,954
現金	8,323

(単位: 円)

## 年次大会特別基金

費目	収入	支出
2012 年度よりの繰越金	623,297	
第 29 回年次大会補填金		108,761
振込手数料		105
利子	90	
2014 年度への繰越金		514,521
<b>合計</b>	<b>623,387</b>	<b>623,387</b>

(単位: 円)

## 学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2012 年度よりの繰越金	1,504,221	
奨励金		200,000
利子	222	
片倉もとこ研究奨励基金	1,000,000	
2014 年度への繰越金		2,304,443
<b>合計</b>	<b>2,504,443</b>	<b>2,504,443</b>

(単位: 円)

支 出	13 年度予算	13 年度決算
<b>事務局費</b>	<b>1,974,930</b>	<b>1,335,854</b>
アルバイト謝金	1,300,000	1,022,500
通信費	100,000	50,530
消耗品費	200,000	72,560
会議費	35,000	15,000
交通費	100,000	0
振込手数料	20,000	21,735
事務局備品費	100,000	31,804
事務局移転費	24,930	24,930
資料保管費	95,000	96,795
<b>事業費</b>	<b>6,519,000</b>	<b>5,055,253</b>
大会開催費	300,000	400,000
大会会場費	34,000	34,000
AJAMES 編集費	100,000	171,176
同欧文校閲費	750,000	73,640
同印刷製本費	2,000,000	2,082,623
編集委員会旅費	100,000	145,740
国際発信(海外招聘)	150,000	196,409
国際発信(海外派遣)	750,000	219,810
AJAMES 宣伝費	50,000	1,670
NL 等発行費	150,000	256,725
NL 等発送費	60,000	60,800
AJAMES 国内発送費	270,000	225,500
AJAMES 海外発送費	100,000	69,270
選挙費用	0	0
国際交流費	100,000	20,000
インターネット広報費	50,000	35,070
公開講演会開催費	500,000	187,820
30 周年企画準備費	100,000	0
中東文献 DB 更新費	850,000	875,000
地域研究学会分担金	5,000	0
託児所基金繰り入れ	50,000	0
諸雑費	50,000	0
<b>支出合計</b>	<b>8,493,930</b>	<b>6,381,107</b>
2014 年度への繰越金	10,680,067	13,796,460
<b>総計</b>	<b>19,173,997</b>	<b>20,177,567</b>

(単位: 円)

## 年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
12 年度より繰越金	51,327	
本会計より繰り入れ	0	
利用料(2 名)	10,000	
保育料		50,300
振込手数料		210
利子	4	
2014 年度へ繰越金		10,821
<b>合計</b>	<b>61,331</b>	<b>61,331</b>

(単位: 円)

## 2014 年度予算

### 本会計

収入	13 年度予算	14 年度予算
<b>2012 年度より繰越金</b>	<b>10,999,297</b>	<b>—</b>
<b>2013 年度よりの繰越金</b>	<b>—</b>	<b>13,796,460</b>
<b>年会費</b>	<b>4,424,200</b>	<b>5,233,700</b>
正・学生会員	4,424,200	5,233,700
2011 年度以前分	85,450	182,700
2012 年度分	152,250	102,500
2013 年度分	994,500	434,700
2014 年度分	3,192,000	1,103,900
2015 年度分	-	3,409,900
賛助会員	0	0
<b>その他</b>	<b>3,750,500</b>	<b>4,250,500</b>
科研費公開講演会費	0	0
科研費国際発信強化	2,500,000	0
科研費 AFMA 開催	0	2,900,000
利子	500	500
AJAMES 販売代金	250,000	350,000
海外郵送費実費	0	0
AJAMES 広告費	0	0
東洋文庫事業分担金	800,000	800,000
NII-ELS 著作権料	200,000	200,000
<b>収入合計</b>	<b>19,173,997</b>	<b>23,280,660</b>

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度(2013 年度) 納付率
2010 年度分		82%
2011 年度分	210,000	36%
2012 年度分	250,000	49%
2013 年度分	805,000	78%
2014 年度分	1,330,000	56%
2015 年度分	5,590,000	
<b>合計</b>	<b>8,185,000</b>	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額  
前年度納付率:予算策定年度の前年度(たとえば2014年度予算であれば2013年度)決算における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額

\*2014年度予算に書かれている各年度(2011~2015年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2013年度における納付率(=2013年度決算における会費納付額÷2013年度予算に書かれている未納額)に5%を足した値を掛けることにより算出している

例)2014年度分会費収入予算(2014年度分会費予想収入)  
=2014年度分会費未納額×(2013年度分会費納付率+5%)  
=1,330,000×(78%+5%)=1,103,900

支出	13 年度予算	14 年度予算
<b>事務局費</b>	<b>1,974,930</b>	<b>1,715,000</b>
アルバイト謝金	1,300,000	1,300,000
通信費	100,000	60,000
消耗品費	200,000	80,000
会議費	35,000	15,000
交通費	100,000	100,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	100,000	40,000
事務局移転費	24,930	0
資料保管費	95,000	100,000
<b>事業費</b>	<b>6,519,000</b>	<b>9,260,000</b>
大会開催費	300,000	400,000
大会会場費	34,000	100,000
AJAMES 編集費	100,000	150,000
同欧文校閲費	750,000	500,000
同印刷製本費	2,000,000	2,100,000
編集委員会旅費	100,000	150,000
AJAMES 宣伝費	50,000	10,000
国際発信(海外招聘)	150,000	0
国際発信(海外派遣)	750,000	0
AFMA 開催費	0	2,900,000
WOCMES 派遣費	0	400,000
国際交流費	100,000	50,000
NL 等発行費	150,000	150,000
NL 発送費	60,000	60,000
AJAMES 国内発送費	270,000	230,000
AJAMES 海外発送費	100,000	70,000
選挙費用	0	150,000
インターネット広報費	50,000	35,000
公開講演会開催費	500,000	500,000
30周年企画準備費	100,000	300,000
文献 DB 更新費	850,000	900,000
地域研究会分担金	5,000	5,000
託児所基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
<b>支出合計</b>	<b>8,493,930</b>	<b>10,975,000</b>
<b>14 年度へ繰越金</b>	<b>10,680,067</b>	
<b>15 年度会費分留保</b>		<b>3,409,900</b>
<b>15 年度への繰越金</b>		<b>8,895,760</b>
<b>総計</b>	<b>19,173,997</b>	<b>23,280,660</b>

(単位:円)

費目	収入	支出
2013 年度よりの繰越金	10,821	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
2015 年度への繰越金		60,831
<b>合計</b>	<b>60,831</b>	<b>60,831</b>

(単位:円)

費目	収入	支出
2013 年度より繰越金	514,521	
利子	100	
2015 年度への繰越金		514,621
<b>合計</b>	<b>514,621</b>	<b>514,621</b>

(単位:円)

費目	収入	支出
2013 年度よりの繰越金	2,504,443	
奨励金		0
利子	300	
2015 年度への繰越金		2,504,743
<b>合計</b>	<b>2,504,743</b>	<b>2,504,743</b>

(単位:円)

## 日本中東学会第 30 回年次大会報告

### 【大会プログラム】

日本中東学会第 30 回年次大会日程

1. 開催場所：東京国際大学第 1 キャンパス 6 号館
2. 日程・時間

第 1 日目：2014 年 5 月 10 日（土曜日）

公開講演会・シンポジウム「日本中東学会 30 年の回顧と展望」

この 30 年間の中東地域の政治・経済的・文化的変容を考え、日本における中東地域研究の変化・発展を回顧するとともに、今後の新たな研究の展開へ向けて提言を行う。

基調講演：板垣雄三（東京大学・東京経済大学名誉教授）「学知の建て替えに向けて－日本中東学会に托された課題」

シンポジウム：赤堀雅幸（上智大学）、私市正年（上智大学）、黒木英充（東京外国語大学）、永田雄三（東洋文庫）、山岸智子（明治大学）

司会：塩尻和子（東京国際大学）

日本中東学会総会

懇親会（東京国際大学 1 号館食堂）

司会：田村愛理（東京国際大学）

東京国際大学挨拶：倉田信靖理事長・総長、高橋宏学長

来賓挨拶（KAMES）：Jeongmin Seo（Hankuk University of Foreign Studies）

学会長挨拶：栗田禎子（千葉大学）

乾杯：宮治一雄（恵泉女学園大学名誉教授）

次期開催校挨拶：富田健次（同志社大学）

閉会挨拶：実行委員長、宮治美江子（東京国際大学）

第2日目：2014年5月11日（日曜日）

個人研究発表

【第1部会】

鈴木啓之（東京大学）「インティファダ（1987～1993年）の展開と国際情勢：パレスチナ各党派の政治声明から」

岩本佳子（京都大学大学院・研修員）「18世紀のオスマン帝国における「征服者の子孫たち」の変遷」

宮下遼（大阪大学）「トルコ古典詩における職人の美化：「床屋の書」を中心に」

河野敦史（中央大学）「清代ハーキム・ベクと参贊大臣の関係に関する一考察—アフマドと徳齡の相互弾劾を事例として—」

小野仁美（学習院女子大学・非常勤講師）「現代チュニジアのシャリーア理解：R.ガンヌーシーのイスラーム的女性解放論」

勝畑冬実（早稲田大学・非常勤講師）「ハーリド・ムハンマド・ハーリドとラシード・リダー～『ムハンマドの啓示（Al-Wahy al-Muhammadi）』における議論を中心に～」

福永浩一（上智大学）「エジプト「七月革命」までのムスリム同胞団：初期同胞団員の著作を通じて」

【第2部会】

磯貝真澄（京都外国語大学・嘱託研究員）「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域の「カーディヤ」」

今堀恵美（聖心女子大学・非常勤講師）「ウズベキスタンとカザフスタン、ハラールへの対極的な対応」

武田祥英（日本学術振興会特別研究員（DC2））「スエズの防衛と資源政策の拠点としてのハイファ—英国の第一次大戦期対パレスチナ政策再考—」

黒田彩加（京都大学）「エジプト・イスラーム中道派の宗教共存論—アウワーの構想とその意義—」

小林和歌子（外務省・専門員）「パレスチナにおける『壁』反対運動—平和構築への影響の分析」

村上拓哉（桜美林大学）「GCC 諸国による湾岸戦争後の安全保障秩序の模索—「外」からの脅威と「内」からの挑戦への対処—」

【第3部会】

金子寿太郎（金融庁）「現下の国際金融規制改革を踏まえたGCCの金融システムに関する一考察」

上山一（筑波大学北アフリカ研究センター）「リビア経済の現状と課題」

川村藍（京都大学イスラーム地域研究センター）「イスラーム金融における民事紛争処理制度：広域的比較研究の可能性」

長岡慎介（京都大学）「マレーシア・イスラーム資本市場の発展とその意義：「東南アジア・イスラーム金融論」再考のために」

松尾昌樹（宇都宮大学）「湾岸アラブ型エスノクラシー」

竹村和朗（日本学術振興会特別研究員（DC2））「沙漠地の所有と利用－現代エジプトにおける法的展開と二つの汚職事件の事例から－」

井堂有子（東京大学）エジプトの食糧補助金制度と『社会契約』

#### 【第4部会】

横田吉昭（東京大学）「トルコ漫画の中の女性表象に見るジェンダー観の一端－男性中心のメディアに現われた伝統と近代の重層－」

鈴木慶孝（慶應義塾大学）「現代トルコの世俗主義と国家的アイデンティティーに関する一考察－宗務庁組織の機能的役割の検討から－」

松尾有里子（お茶の水女子大学）「近代オスマン帝国における「女性」雑誌と出版文化」

井口有奈（同志社大学）「ムスリム社会の民主化と多文化共生－トルコ共和国における取り組みを例に－」

Qolamreza Nassr（広島大学）, “Taleqani as a Humanitarian Islamist: His Ideology and Activity under Pahlavi Dynasty”

田中友紀（九州大学）「カッザーフィー政権初期の権力基盤構築の研究：リビア王政期との連続性に着目して」

Jeongmin Seo (Hankuk University of Foreign Studies), “Transformation of Korea-Arab Relations in the 21st Century”

#### 【第5部会】

大塚修（東京大学）「ハムド・アッラー・ムスタウフィーとイーラーン・ザミーン：「新出」史料『勝利の書続編』の記述を中心に」

野口舞子（お茶の水女子大学）「ムラービト朝期におけるマグリブのウラマーの活動と役割」

朝田郁（京都大学）「ハドラミー・サイイドの血統保存戦略とタリーカー東アフリカ・ザンジバルの事例から」

竹田敏之（京都大学・特任研究員・非常勤講師）「モーリタニアにおけるアラブ・イスラーム諸学と広域知識人ネットワーク」

小島宏（早稲田大学アジア・ムスリム研究所）「西欧と日本におけるイスラームフォビアの比較分析」

井上貴恵（東京大学）「ルーズビハーン・バクリー・シーラーズィーの預言者・聖者論についての考察」

近藤百世（東北大学）「ガージャール朝期イランにおける都市の変化に関する一考察：都市ガズヴィーンの変化を中心として」

### 【第6部会】

- 小野亮介（慶応義塾大学）「回教政策の再出発？－「(アブデュルレシト・) イブラヒムの回教施設対策提案」を読む」
- 役重善洋（京都大学）「中田重治のシオニズム理解について～日本ホーリネス教会と在満ユダヤ人問題」
- 鶴見太郎（日本学術振興会海外特別研究員）「ジャボティンスキーか、プーチンか：「イスラエル我が家」党首リーベルマンと旧ソ連」
- 久保幸恵（神奈川工科大学・非常勤講師）「オランダは多文化主義の国ではなくなったのか？～ムスリム移民問題に対する政策・世論の変遷を再評価する」
- 馬場多聞（九州大学）「13世紀のラスール家の人びと」
- 大坪玲子（東京大学・学術研究員）「カート・家族・部族：イエメンにおける嗜好品の流通の特徴と比較」
- 小林周（慶應義塾大学）「政変後のリビアにおける地域主義の位相」

### 【第7部会】

- 千葉悠志（日本学術振興会特別研究員（PD））「知の受容に関する一考察－アラブ・メディア研究の系譜と近年の動向」
- 川本智史（日本学術振興会特別研究員（PD））「イスタンブルの郊外における都市儀礼に関する一考察：ユスキュダルを例として」
- 鳥山純子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー）「時代の交差点としての学校－カイロの私立学校長の「個の民族誌」から」
- 大川真由子（早稲田大学）「オマーン帝国と国史形成－オマーンの国定社会科教科書と政府刊行歴史書の分析から－」
- 依田純和（大阪大学）「トリポリで出版されたアラビア語ユダヤ教徒方言テキストの変種について」
- 鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）・鷺見克典（名古屋工業大学）「日本の大学におけるアラビア語学習者の動機づけと学習関連結果：自己決定理論に基づく学習動機づけの理解と役割」

### 【企画セッション1】

- A New Horizon of the Middle East Studies (MIZUTANI Makoto・Arabic Islamic Institute)  
Chairperson : MIZUTANI Makoto
- NAGASAWA Eiji (The University of Tokyo), “The Future of Post-Colonial Regimes in the Arab World”
- MIYATA Osamu (University of Shizuoka), “Upgrading Japan’s Policy Towards Iran”
- KAKIZAKI Masaki (Temple University), “Specifying the effect of religiosity on political behavior: What does Islam explain in Turkish politics?”
- MIZUTANI Makoto, “A New Balance in the Study of Islam: Proposing Studies on hitherto

Neglected Areas”

【企画セッション2】

Examining Preventive Diplomacy in the Middle East from the Perspective of Area Studies  
(NAKAMURA Satoru・Kobe University)

Chairperson: NAKAMURA Satoru

Commentator: TATEYAMA Ryoji (Guest Researcher, The Institute of Energy Economics)

IMAI Kohei (Postdoctoral Research Fellow, the Japan Society for the Promotion of Science),  
“Turkey’s Multi-track Diplomacy during the JDP Era: A Model Case of Preventive Diplomacy  
in the Middle East”

Saleh al-Mani (Ministry of Higher Education of Kingdom of Saudi Arabia)“Preventive  
Diplomacy: A Saudi Perspective”

SUECHIKA Kota (Ritsumeikan University)“The “Resistance Axis” and Its Implication for the  
Post-Arab Spring Middle East Regional (Dis)order”

【公開講演会・シンポジウム】

初日の公開講演会・公開シンポジウムでは「日本中東学会30年の回顧と展望」を統一テーマとして、それぞれの先生方のこれまでの研究を踏まえて、過去から現在の日本中東学会の研究実績に対する厳しいご指摘を頂くと同時に、学会には、明日からの研究へ向けて重く大きな役目を与えられたようである。

先ず板垣雄三先生による「学知の建て替えに向けて——日本中東学会に托された課題」の講演会が行われた。時間は40分を予定していたが、中東学会の創立に関わってこられた板垣先生にとっては、時間はないようなものとなり、「モダニティ論」と『『日本』イデオロギー論』を中心にして、いまだに欧米中心主義の中にとどまっている日本の中東研究者への厳しい批判も展開された。さらに、議論は「西暦7世紀からの近代」論と「スーパーモダニティ」論へ移り、土台としての文明戦略マップとタウヒード論を、熱意をもって展開された。

その後のシンポジウムでは、赤堀雅幸（上智大学総合グローバル学部教授）先生がエジプトのフィールド研究のご経験から「現代の地域研究が試される場の一つとしてのエジプト」を取り上げられ、私市正年（上智大学）先生は、「アルジェリア史研究の現在—歴史研究と地域研究の狭間からの展望」として、アルジェリア史研究の対象が多様な形でオーバーラップしていることを指摘され、フランス語の資料の問題点にも触れられた。黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）先生は、「二つの内戦を超えて」として、ペイルートの内戦から現在のシリア内戦までの地域紛争に対して、学知がこれらの現象に取り組むためには、多方面から考究する必要があるとされた。永田雄三（東洋文庫研究員）先生は「近年のオスマン史研究の回顧と展望」として、1990年代以降における東西冷戦構造の解体と民族紛争の激化、9.11事件とその後の状況といった国際環境の激変の中でオスマン史研究が再び注目されていることを取り上げられた。山岸智子(明治大学教授)先生は、「日本のイラン研究と

日本中東学会」のテーマで、激動する中東諸地域との関わりのなかで、イランは日本人が比較的親近感を感じる国であり、今後、さらにイランという研究対象の動態を捉えるための新しい視点を模索すべきであろうとして、様々な問題をグローバル化のネットワークの中で研究する視野が必要になると語られた。

公開講演会とシンポジウムは多くの聴衆を集め、熱い議論が交わされたが、講演者もパネリストも、いずれも名だたる論客ばかりであり、発言時間が不足するという事態となってしまった。事前にそのことを考慮して、討論と質疑応答の時間を1時間も用意していたが、その時間も不足するに至り、期待していた討論に入ることのないまま、時間を10分超過して終了した。講演者の板垣先生の理論も、聴衆が十分に理解するためには、さらに時間が必要であり、パネリストの発言も、一人当たり20分という設定では少なすぎた。

反省点は沢山あるものの、公開講演会・シンポジウムでは、まさに第30回記念年次大会にふさわしい、大変に高度で濃密な議論が展開されたことについて、実行委員会として、板垣先生、赤堀先生、私市先生、永田先生、黒木先生、山岸先生に、心から御礼を申し上げます。なお、この公開講演会・シンポジウムでの議論は、後日、日本中東学会の機関誌AJAMESに掲載される予定です。

(塩尻和子)

### 【研究発表会場から】

#### 第1部会

##### —午前の部—

鈴木啓之（東京大学）「インティファダ（1987～1993年）の展開と国際情勢：パレスチナ各党派の政治声明から」

本発表では、1987年から1993年まで続いた第一次インティファダの期間中に大量発行、配布されたパレスチナ諸党派の政治声明リーフレットの分析をもとに、当時の各党派間の占領地内外の諸情勢に対する認識や世界観の差異が報告された。これまで未刊行であった西岸地区北部ナーブルスの市立図書館に収蔵された862通に及ぶリーフレット資料の分析の中間報告であり、抵抗運動と和平交渉プロセスの進行とともに変化していく各党派の近隣諸国に対する姿勢や立場といった先行研究には見られない新たな知見が提示された。

岩本佳子（京都大学大学院）「18世紀のオスマン帝国における「征服者の子孫たち」の変遷」

本発表は、オスマン帝国のバルカン半島征服に伴い半島へ移住したユリユックの中で15世紀に「ユメリのユリユック」と総称された免税特権を持つ軍役、労役集団が、17世紀末の帝国の戦争期に「征服者の子孫たち」という総称で再び軍役集団として徴用された歴史的事実に注目したものである。彼らの軍隊の中での具体的役割や免税特権の変化、帝国内における戦略上の位置について、財務台帳、枢機勅令簿、帳簿資料、年代記などの歴史資料の分析を通じ明らかにした。（吉田京子）

第1部会の午前の部後半は、あえて共通点を探れば、テュルク系諸民族に関連する二つの報告からなるセッションであった。

宮下遼氏による「トルコ古典詩における職人の美化:「床屋の書」を中心に」は、17-18世紀のオスマン朝詩人による、床屋を題材とした詩「床屋の書」二篇を紹介し、そのモチーフや主題などを論じたものであった。会場からは、アラブ詩・ペルシア詩との関係、現実世界の床屋との関係性、他の職種に関する詩の有無などについて質問があった。「床屋の書」以外にも床屋にまつわる詩はあるとのことであったが、この二篇以外は対象とされなかった。

次の報告は、河野敦史氏による「清代ハーキム・ベクと参贊大臣の関係に関する一考察:アフマドと徳齡の相互弾劾を事例として」であった。現地有力者から任用される行政長官ハーキム・ベクと、中央から任命される参贊大臣との対立関係を、1852年に生じた事件に焦点を当てて分析したものである。この事件の調査報告などの漢文の文書史料を利用して丹念に跡づけた精緻な研究であった。会場からは、参贊大臣の出自(八旗だとのこと)、この事件の歴史的背景などについて質問があった。

宮下報告に12、3名、河野報告にはおよそ10名の聴衆が参加した。前者と同じ時間帯に別部会でオスマン帝国史に関する報告があり、また、その一つ前の時間帯にも二つの部会でオスマン史の報告が同時に行われていた。報告者の都合やプロジェクトの有無など、大会運営側のご苦労は並々でないと思うが、この点だけが少し残念であった。(秋葉 淳)

#### —午後の部—

小野仁美(学習院女子大学・非常勤講師)「現代チュニジアのシャリーア理解:R.ガンヌーシーのイスラーム的女性解放論」

本発表は、2011年政変以前のチュニジアの政権を、世俗主義的な改革を推進しつつもイスラーム的正当性も追求する体制と規定し、ナフダ党首ガンヌーシーのチュニジア身分関係法に対する批判や、シャリーアと民主主義を両立させたイスラーム国家において真の女性解放が達成されるという主張を分析した。分析対象が1980~90年代の著作であったこともあり、質疑応答においては、政変以降の彼の動向などについて活発な議論が交わされた。

勝畑冬実(早稲田大学・非常勤講師)「ハーリド・ムハンマド・ハーリドとラシード・リダー:『ムハンマドの啓示(Al-Waḍy al-Muḍammadu)』における議論を中心に」

イスラーム主義への転向が明確になるまでのハーリド・ムハンマド・ハーリドは世俗主義者であったと考えられてきたが、本発表は1950年代の彼の著作をラシード・リダーの著作と比較し前者の当時の立ち位置を再考しようとするものである。勝畑氏は、幾つかの論点に関してハーリドが議論の根幹の部分でリダーの主張に依拠していたことを明らかにしており、本発表は両者を対立的に捉える従来の思想史理解に一石を投じるものであった。

福永浩一(上智大学)「エジプト「七月革命」までのムスリム同胞団:初期同胞団員の著作を通じて」

本発表は、アッバース・スィーサー(1918-2004)の回想録などに見られる初期ムスリム同胞団員の実体験や内部記録をバンナーの著作に照らし合わせることで、1936年から1940年代末までの同胞団において指導部の方針に下位団員がどのように呼応し、そのことがいかなる政治状況を招来したのかを分析しようとするものであった。下からの視点に着目した意欲的な発表であり、バンナーと秘密組織の関係性などについて活発な質疑応答を惹起した。(菊池達也)

## 第2部会

### —午前の部—

磯貝真澄(京都外国語大学・嘱託研究員)「19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域の『カーディー』」

本発表ではヴォルガ中下流域からウラル南麓の地域に居住するテュルク系ムスリムの家族意識とそのロシア帝内におけるイスラーム法的な取扱いの実態を探る目的で、19世紀末の遺産分割に関わるテュルク語の遺産相続に関する「訴訟」文書を取り上げ、その行政的な処理を仔細に検討した。具体的な事案としては特異なものではないが請願書が保存された例自体が希少とのことであり、こうした研究の蓄積の過程でさらに興味深い事例の発掘が期待される。

今掘恵美(聖心女子大学・非常勤講師)「ウズベキスタンとカザフスタン、ハラールへの対極的な対応」

本発表では中央アジアの2ヶ国における「ハラール食品」の認証の制度化が2002年以降最近までに対照的な経緯をたどったことに注目し、その背景となった要因を考察した。報告では両国における国家機関の関与の有無に特に注目したが、質疑の中でイスラーム主義への警戒の可能性も示唆された。ハラール食品については2020年に東京オリンピックが開催される日本でも今後関心の高まりが予想されるだけに、フィールド調査の知見に基づく興味深い報告となった。(鈴木均)

武田祥英(日本学術振興会特別研究員(DC2))「スエズの防衛と資源政策の拠点としてのハイファ—英国の第一次大戦期対パレスチナ政策再考—」

本発表は、第一次大戦期英国が戦後のオスマン帝国領土分割を計画した際、確保すべき地域として「パレスチナ」を設定した背景を、英国の対中東政策との関連から検討した。その際に、「オスマン帝国アジア地域に関する委員会」(「ド・ブンセン委員会」)の議事録に依拠し、この議事録を精緻に分析することにより、パレスチナが設定されるに至るプロセスと、その背景としてのハイファの戦略的重要性を明らかにした。黒田彩加(京都大学)「エジプト・イスラーム中道派の宗教共存論—アウワーの構想とその意義—」

本報告は、エジプトにおいて1980年代から現れたイスラーム中道派の思想的潮流に注目し、彼らが展開している宗教共存論とイスラーム国家論を考察したものである。その際、中道派の思想家として、2012年大統領選挙に立候補した人物でもあるサリーム・アウワーを取り上げ、彼の著作の内容が詳細に分析された。

発表後には前者については依拠史料、後者については世俗主義者の市民社会論との比較やコプト教徒による評価などをめぐってフロアとの有意義な質疑応答がなされた。両者の今後の研究の進展が大いに期待される。(岩崎えり奈)

#### —午後の部—

第2部会の午後のセッションではパレスチナおよび湾岸地域に関する2つの報告が行われた。

1番目の小林和歌子会員(外務省)による「パレスチナにおける『壁』反対運動——平和構築への影響の分析」は、2002年からイスラエルによって建設が始まったヨルダン川西岸地区の分離壁について、その建設反対運動の非暴力的側面に着目した報告であった。報告では、様々な壁反対運動に関わる非暴力的運動の詳細が取り上げられた。その上で、それらの運動が、当事者だけでなく国際社会を巻き込む大きな流れ結実しつつあることが論じられた。現地の visible な側面に注目が集まりがちな分離壁反対運動に対して、本報告は、グローバルな文脈における運動の意義と可能性を明快に指摘したものとと言える。

2番目の村上拓哉会員(中東調査会/桜美林大学)による「GCC諸国による湾岸戦争後の安全保障秩序の模索——『外』からの脅威と『内』からの挑戦への対処」は、1990年代の湾岸地域の安全保障秩序の形成過程を取り上げ、GCC諸国が直面した外部脅威と内部脅威の両面から検討した報告であった。報告では、湾岸戦争後のGCC諸国における米国とのハブ・アンド・スポークス安全保障体制の成立は、内部脅威の縮小と外部脅威の認識の高まりという同時期特有の状況によって生まれたものであることが論じられた。本報告は、これまで主に米国の外交政策の文脈で論じられることの多かったGCC諸国の安全保障体制を、当事者国の観点から捉え直した意欲的なものであったと言えよう。(長岡慎介)

(D.M. Dimitrov 会員は欠席のため、発表中止)

#### 第3部会

##### —午前の部—

金子寿太郎氏(金融庁)「現下の国際金融規制改革を踏まえたGCCの金融システムに関する一考察」

リーマンショックを契機としてG20や金融安定理事会等から提案された金融機関への規制・監督の強化策が進む中、他方、GCC諸国においては、欧米先進国の金融規制改革の流れに沿った対応が十分でない点が指摘された。ただし、GCCの金融システムには、①レンティア国家としての成り立ち、及び、②イスラム教特有の倫理観という特徴があり、その特徴をよく認識した上で、GCC側からの国際的な議論への積極的な参加を求める提案がなされた。

上山一氏(筑波大学)「リビア経済の現状と課題」

カダフィ政権が長年にわたり石油・ガスの輸出収入を分配しながら歳出増による国民の不満緩和に取り組んできた状況が説明された。2003年12月以降の開放政策によ

る経済構造の変化、その後のカダフィ政権の崩壊、さらに引き続き混乱はなぜ生じたかの検討も行われ、外国企業の誘致と国営企業の改革という2つの処方箋の重要性が指摘された。カダフィ政権崩壊前と比べての経済政策の差異に関する質問等が出され、熱心な討論が行われた。(武石礼司)

川村藍(京都大学イスラーム地域研究センター)「イスラーム金融における民事紛争処理制度：広域的比較研究の可能性」

本発表は、イスラーム金融に関わる民事紛争処理制度を、地域的な比較によって検討を行おうとするものがあった。近年、イスラーム金融に係る民事紛争の増加に伴い、裁判外紛争処理制度が活用される機会も多くなっている。一方、ドバイでは裁判所を介する民事訴訟や裁判によらない紛争解決方法とも異なる新たな紛争処理制度がドバイ・ショック後に整備された。こうした紛争処理制度は、既存の紛争処理制度が抱える問題を解消する点で画期的であり、イスラーム金融をめぐる民事紛争に対応する他地域の紛争処理制度に比べて、より先進的であるとの見解が示された。

長岡慎介(京都大学)「マレーシア・イスラーム資本市場の発展とその意義：「東南アジア・イスラーム金融論」再考のために」

マレーシアは、イスラーム金融の実践において先駆的な役割を果たす一方で、理念を忘却し、現実にすり寄っていると、時にはイスラーム経済学界からの非難にさらされてきた。本発表は、マレーシアにおけるイスラーム資本市場に着目し、その発展を学説史の文脈から考察することによって、マレーシアでのイスラーム金融に対する従来の評価を見直そうとするものである。マレーシアが、「理念からの乖離」といったネガティブ・イメージを独自の対応で乗り越えたとし、こうした試みは新たなイスラーム金融論を提起したものの評価が示された。(上山一)

—午後の部—

松尾昌樹「湾岸アラブ型エスノクラシー」

多くの外国人労働者を抱える湾岸アラブ諸国では、国民と移民の間に著しい格差を維持すること(国籍型エスノクラシー)によって安定的な支配を目指している。報告では、財政とエスノクラシーの関係についてクウェートとバハレーンを比較しながら議論が進められ、財政的に余裕のあるクウェートでは明確なエスノクラシーを維持できるが、財政的な余裕のないバハレーンではエスノクラシー体制が維持できなくなっていることが指摘された。

竹村和朗「沙漠地の所有と利用—エジプトの民法874条と1950年以降の特別法の検討から」

エジプトの国土の9割以上を占める沙漠地は、富の源泉と見なされ、法による統治の対象となってきた。本発表では、こうした沙漠地に関わる一般法として民法874条に注目し、同時に1950年代以降に公布された一連の特別法による変遷を辿った。関連する法律条文の精査から、民法874条に込められたイスラーム法的な「死地蘇生」の思想が、国家(とりわけ軍)を中心とする中央管理体制により代替されたことが明らか

かになった。

井堂有子「エジプトの食料補助金制度と「社会契約」

エジプトのナズィーフ内閣期の食料補助金制度について論じた。同国の補助金制度は食糧・燃料補助金を二本柱とし、食糧補助金（特にパン）は比率では小さいが政治的含意は大きい。同期間、制度改革は進められたが、穀物価格高騰や政治状況を反映し支出は縮小・拡大した。ナセル期以降の国家-社会関係の原型＝「社会契約」は、本来の概念から離れ、「生産と分配」での政府の役割縮小に関する広報手段として使用されてきていることが指摘された。（辻上奈美江）

#### 第4部会

##### —午前の部—

横田吉昭（東京大学）「トルコ漫画の中の女性表象に見るジェンダー観の一端—男性中心のメディアに現われた伝統と近代の重層—」

本報告によれば、トルコにおける漫画は、19世紀後半に西洋から導入されて以来、大衆性を有する一方で、改革的な風刺媒体として運用されてきたという。発表者は、著名なトルコ人漫画家の図像を多用しながら、そこにあらわれるジェンダー観の変遷を、「アダムルック」／「ハレムリッキ」、「アチック」／「カパル」といった概念を用いて分析を試みた。当初、近代的女性像が描かれる一方、男性大衆の好みに合う、性を強調した女性像も数多く描かれ、後者の女性像はその後増加した。本報告は、その背景にある男性中心的社会・出版文化を指摘しつつ、近年の女性編集者・漫画家による *Bayan Yani* 発刊がもたらす変化の可能性について言及した。

鈴木慶孝（慶應義塾大学）「現代トルコの世俗主義と国家的アイデンティティーに関する一考察—宗務庁組織の機能的役割の検討から—」

トルコ共和国は、建国以来、政教分離と世俗主義を国是としてきたが、その一方で、宗教的事象は宗務庁により管理されてきた。しかし、宗務庁については、その重要性にもかかわらず、先行研究では看過されてきた。本報告では、第16代長官バルダクオール の主張をおもな事例として、その機能的側面の詳細な分析が行われた。80年代以降のイスラーム復興の主流化や公正発展党の台頭に代表される、私的・政治的、両面で多様化していくトルコのイスラームのあり方と、トルコ民族とスンニ派教義に依拠した、ある意味で本質主義的イスラームのあり方を是としつづける宗務庁とのあいだの乖離が鮮やかに描き出された大変興味深い報告であった。（岩崎真紀）

松尾有里子（お茶の水大学）「近代オスマン帝国における「女性」雑誌と出版文化」

この発表では、オスマン帝国において19世紀後半から始まった女性を主たる読者に想定した雑誌の刊行状況が1次資料の分析に基づいて示され、近代化が進む社会の中での意義について言及がなされた。その中で、教養・情報記事発信に加え、当時の女子公教育の補完的な面があるなど興味深い考察が示された。また、刊行物が短命であった要因の一つを新資料により示した点に、会場から貴重な事実の発掘であるの指摘が上がった。

井口有菜（同志社大学）「ムスリム社会の民主化と多文化共生—トルコ共和国における取り組みを例に—」

この発表では、現代のトルコ共和国人口の多くを占めるムスリムの中で、少数派のアレヴィーと呼ばれるいわゆる神秘主義的宗派に対する、体制側による同派への対応が示された。トルコでは EU の提言などを契機として社会では民主化が進み、少数民族との共生的対応が進んでいるが、イスラーム主義的な現政権の下で、憲法で世俗主義が原則とされながら宗教庁による多数派を中心とする対応があるなど、その複雑な側面が示された。（横田吉昭）

—午後の部—

Jeongmin Seo (Hankuk University of Foreign Studies) “Transformation of Korea-Arab Relations in the 21st Century”（当初第3発表の予定だったが変更）

韓国と湾岸諸国はこの40年間、協調的経済関係を維持してきたが、9.11を境に、原子力、政治、軍事といったより戦略的關係へとシフトしてきている。本報告では、この変化の歴史的背景が概観され、二地域の軍事協力に焦点が当てられた。これまで多国籍軍や平和維持活動を除き、海外派兵を行わなかった韓国軍は、2011年に軍事協力を目的とし、特殊部隊を UAE へ派遣した。本報告により、この派遣が、韓国の対アラブ関係における大きな変化の証左として明らかになった。フロアからは、日本と湾岸諸国との関係との類似性が指摘されるなど、活発な質疑応答が行われた。

田中友紀（九州大学）「カッザーフィー政権初期の権力基盤構築の研究：リビア王政期との連続性に着目して」

カッザーフィーが政権奪取後、安定した統治体制を築きえた背景について、リビア王国や歴史的三地域（トリポリタニア、フェザーン、キレナイカ）との関連で分析がなされた。本報告によれば、特定地域優遇、支配一族の弱体化等により、前体制であるリビア王国から人心が離れていったのに対し、カッザーフィー政権は、三地域の政治的バランスを重視したことと、旧王国関係者の大規模粛清を行わなかったことから、安定した。先行研究の少ないカッザーフィー政権研究として、報道機関の情報や旧王室関係者からの聞き取りをもとにした意欲的な発表だったので、今後は、政治体制や統治方法の定義を明らかにし、それぞれの連続性について分析する等、フロアからのアドバイスを生かした研究を期待したい。

Qolamreza Nassr（広島大学）“Taleqani as a Humanitarian Islamist: His Ideology and Activity under Pahlavi Dynasty”（当初第1発表の予定だったが変更）

20世紀中葉、アーヤットラーをつとめたマフムード・タルカーニー（1911-79）は、イラン・イスラーム革命との関連で語られることが多いが、本報告は、タルカーニーの人道主義者的イスラミストとしての側面に焦点を絞り、彼の生い立ちから晩年にいたるまでの活動の分析を行った。独自のクルアーン解釈を行い、政権と対立し、ときに同胞ウラマーすら痛烈に批判したタルカーニーに関する詳細な発表は、多様なイスラーム解釈が存在する今日、大変示唆に富むものであった。その一方で、フロアから、アリー・シャリーアティー（1933-73）との比較や現代イランにおけるタルカーニーの

位置づけに関する質問が出たことから分かるように、今後は、思想史やイラン史といったより大きな視点からの分析がなされることを期待したい。(岩崎真紀)

## 第5部会

### —午前の部—

大塚氏は、イルハーン朝後期に活躍した知識人ムスタウフィーによる著作『勝利の書 続編』の分析を通じ、君主アブー・サイド没後の政治社会的混乱の実態を明らかにすると同時に、「イーラーン・ザミーン」という言葉が多用されるようになった原因・背景について検討を行った。結語では、1335-1344年のイラン史は『勝利の書 続編』を根本史料として再考されるべき点が強調された。質疑応答では、「イラン」という概念がイルハーン朝のいつ頃から使用されるようになったのかについてさらに活発な議論がなされた。

野口氏の発表「ムラービト朝期におけるマグリブのウラマーの活躍と役割について」では、君主と関わりがあったウラマーについて、法学者伝記集やスーフィー・聖者伝記集などの史料をもとに、とくにユースフ期のカーディーに焦点を当てながら、詳細な分析結果が報告された。また、司法行政に関する職の多様性についても指摘がなされた。質疑応答では、ガザーリーの書の焚書について、「禁じたのは誰か」をめぐる問題とその背景について多角的な議論が交わされた。(竹田敏之)

朝田郁(京都大学大学院博士課程)「ハドラミー・サイドの血統保存戦略とタリーカ—東アフリカ・ザンジバルの事例から—」

朝田氏は、アラビア半島南端部のハドラマウト地方から東アフリカ島嶼部のザンジバルに移住したアラブ移民ハドラミーの移住の経緯、ハドラミーの中のサイドのアラウィー家と関係の深いアラウィー教団のザンジバルとそれ以外の地域での活動、家系図によって異人性と偉人性を再生産するアラウィー家を含むサイドと、現地に同化するサイド以外のハドラミーについて報告した。

竹田敏之(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員)

「モーリタニアにおけるアラブ・イスラーム諸学と広域知識人ネットワーク」

竹田氏は、モーリタニアにおいてアラビア語がフスハーに近い特徴を有し、マフダラ(移動型私塾)によって特に文法学が発展し、モーリタニア出身の知識人が東アラブの文芸復興や湾岸諸国の発展に大きく貢献したことを明らかにし、現代アラブ世界におけるモーリタニアの位置づけの再検討を迫った。

どちらも中東の“周縁”に位置する地域からの発表であったが、活発な質疑応答が行われ、関心の高さがうかがわれた。(大坪玲子)

### —午後の部—

小島氏の報告は、非ムスリムが持つイスラーム／ムスリムのイメージに関する個票データに基づき、性別や世代といった背景を考慮しつつ、メディアの影響等によってイスラームフォビアが醸成される様子を日欧で比較するものであった。報告内で示さ

れたデータと分析は断片的であったが、報告者自身によればデータの集計時期によってかなりの変化が見られ、また様々な比較対象を持ちうる壮大なテーマなだけに、今後の展開が期待される。

井上氏の報告は、12世紀のスーフィー、ルーズビハーンの預言者・聖者論を、階梯に基づく理解と階梯にとらわれない理解の相反する2つの面が見られる点に着目して考察するものであった。さらにその内容を、ルーズビハーンが自身を預言者・聖者と見なしたこと、また当時のスーフィズム思想における「正統」を巡る状況と照らし合わせることで、彼の預言者・聖者論の独自性を浮かび上がらせており、報告の完成度の高さがうかがえた。

近藤氏の報告は、ガージャール朝期の都市ガズヴィーンが、サアド・サルタネとサーラール・アクラムの2人の知事の時代に、周辺都市への交通網の整備と新式学校による近代教育の導入によって発展した様子を述べるものであった。精緻な都市研究であったことに加え、ハード面とソフト面の変化によるガズヴィーンの発展を通して近代イラン黎明期の一場面を描き出す、臨場感のある報告であった。(高尾賢一郎)

## 第6部会

### —午前部—

小野亮介氏「回教政策の再出発?—< (アブデュルレシト・) イブラヒムの回教施設対策提案>を読む」

発表者は、津田塾大学図書館今岡十一郎文庫のなかに偶然「イブラヒムの回教施設対策提案」を見つけ、これを手がかりに、特に1930年代における亡命ロシア系・トルコ人と日本の政治家、軍関係者などとの関係や彼らトルコ人間の関係、そして日本の対イスラーム政策について明らかにしようとした野心的な研究発表であった。ただ、発表のなかで提示された結論のより明確な裏付けが今後の課題といえよう。尚、会場からは、今岡十一郎文庫に何故このような「提案」が残されていたのか、などの質問が出された。

役重善洋「中田重治のシオニズム理解について—日本ホーリネス教会と在満ユダヤ人問題」

発表者は、大戦間の日本における対ユダヤ教、ユダヤ人観は、シベリア出兵などの影響を受けた反ユダヤ主義的風潮とパレスチナのシオニズム運動の進展の影響からこれを支援しようとの動きが見られたとした上で、何故ホーリネス教会の創始者中田重治が満州事変以降シオニズム運動を支援したのかについて考察が加えられた。発表者自身も言及していたが、1930年代後半の考察がほとんどなく、今後の課題であり期待したい。尚、会場からは、中田のシオニズム理解やパレスチナへの入植活動への考えなどについて質疑応答があった。(宇野昌樹)

鶴見太郎「ジャボティンスキーか、プーチンか——「イスラエルわが家」党首リーベルマンと旧ソ連」

ロシア語文献とヘブライ語で書かれた党首リーベルマンの自著『私の真実』の読解

を通じて、アラブ人／パレスチナ人に強硬姿勢を貫きながらイスラエル第3党に躍進した「イスラエルわが家」の背景を、人口の2割を占める旧ソ連系移民との関わりから読み直した。旧ソ連からの移住やイスラエル内での旧ソ系移民の背景を丹念に追うとともに、リーベルマンが自らも含まれるロシア系をイスラエルの正統な歴史の担い手と意識していることが示された。旧ソ系移民の存在からシオニズム、イスラエルの思想的特徴を捉え直し、旧ソ連系移民の母体を背景にもつリーベルマンによるイスラエル外交の独自の展開を予見する刺激的な報告となった。

久保幸恵「オランダは多文化主義の国ではなくなったのか？——ムスリム移民問題に対する政策の変遷を再評価する。」

オランダにおける多文化主義の変容を、リベラル＝コミュニタリアン論争との関係で整理した。政府の移民政策の変化と政治政党の主張が変化するなかで、定冠詞付のイスラムへの言及が出され、移民問題として焦点化され、多文化主義の許容対象からムスリムを外すプロセスが考察された。フロアからは、ここで語られるイスラムとは何を意味するのか、ムスリム移民側の反応しているのか等、より踏み込んだ考察を求める発言が出た。(植村清加)

#### —午後の部—

馬場多門会員（九州大学博士後期課程）による「13世紀のラスール家の人々」は、イエメン・ラスール朝王家について、13世紀末の資料『知識の光』を用いて検討した意欲的な発表であった。王家を構成する各家庭やその成員、収入などを検証し、そこからラスール朝の支配体制に関わる考察を試みている。これまで王家そのものを対象とした研究がなかったこともあり、今後のラスール朝研究に新たな光を与えうるアプローチと言える。

大坪玲子会員（東京大学学術研究員）による「カート・家族・部族：イエメンにおける嗜好品の流通の特徴と比較」は、現地での豊富なフィールドワークを駆使した発表であった。発表者にはカート研究の長い経験があり、その蓄積と最近のフィールドワークが相まって、各地方によって異なるカートの流通が細かく説明され、それらの消費に関わる嗜好や部族といった社会的な特徴が指摘された。

小林周会員（慶応大学後期博士課程）による「政変後のリビアにおける地域主義の位相」は、リビアの国家再建に関わる大変有意義で興味深い発表であった。現在の混乱は地域間対立の様相を呈しているが、その内実は史的背景を持った地域や部族よりも、むしろ経済格差や新旧の世代対立などの現代的な問題に基づくものと指摘された。このような分析は、リビアのみならず他の事例にも応用可能であり、今後の成果が大いに期待される内容であった。(松本弘)

#### 第7部会

##### —午前の部—

千葉悠志（日本学術振興会特別研究員 PD）

「知の受容に関する一考察 — アラブ・メディア研究の系譜と近年の動向」

千葉会員の発表では、まず 20 世紀初頭から近年までのアラブ・メディア研究の学説史が詳細に跡付けられ、従来、欧米メディア研究とアラブ世界のメディア研究との間にみられた非対称的な知の構造が、1990 年代以降、欧米メディア研究での「脱西欧化」や、アラブ人研究者による英語でのアラブ・メディア理論の提唱により、変容してきていることが指摘された。発表後には、アラブ・メディア研究の開始時期などについて質疑応答があった。

川本智史（日本学術振興会特別研究員 PD）

「イスタンブルの郊外における都市儀礼に関する一考察：ユスキュダルを例として」

川本会員の発表は、オスマン朝期におけるスルタン・大宰相などの権力主体による大規模な都市儀礼・祝祭がしばしば市外の空地でも举行されていたことを、主に 17 世紀初頭のユスキュダルの事例を中心に考察し、スライドで地図や絵画史料を提示しつつ、儀礼パターンやまた遠征前の祝祭のもつ権力者の威信確認の機能などについて説明された。発表後、都市儀礼と宮廷儀礼の違いや史料についての質疑応答があった。いずれの発表も手堅く、今後の研究の進展が楽しみに思われる内容であった。

（鷹木恵子）

鳥山氏の報告は、エジプト・カイロ近郊に位置するアメリカ式の教育を謳った私立アメリカンディプロマ校でのエジプト人女性校長からの聞き取り調査をもとにしたものであった。教科書やカリキュラムの分析だけでは見えてこない学校教育の現場における世代を超えた階級・社会構造の再生産メカニズムの一端を明らかにしようとする意欲的な報告であった。報告後には用語の意味や聞き取り調査の方法に関する質疑応答がおこなわれた。

大川氏の報告では、オマーンの国定社会科教科書と指導教本の分析から、今日の同国における国史叙述が論じられた。具体的に、1990 年代以降のオマーンで、「オマーン帝国」という用語が次第に散見・多用される傾向が生じてきたことが指摘されるとともに、それを国家アイデンティティの核に据えようとする傾向がみられることが指摘された。報告後には、政府の意図やナショナリズムとの齟齬に関する活発な質疑応答がおこなわれた。（千葉悠志）

—午後部—

依田純和（大阪大学）

「トリポリで出版されたアラビア語ユダヤ教徒方言テキストの変種について」

20 世紀前半にトリポリで出版された、ヘブライ文字で記述されたアラビア語による新聞や法令集、ヘブライ語教育やシオニズム啓蒙などを目的としたテキストが言語的に解析され、その口語的要素、および古典的要素と口語的要素が混在している例について、特徴ごとに用例が示された。報告者はそれを「変種」として取り出したが、変種という概念の設定基準への言及が必要だと感じた。ともあれ、報告者がイスラエルで収集したというテキスト自体が興味深いものであり、時間の都合上一部を端折るかたちでの報告となったのは惜しまれた。

鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）、鷺見克典（名古屋工業大学）

「日本の大学におけるアラビア語学習者の動機づけと学習関連結果—自己決定理論に基づく学習動機づけの理解と役割—」

本報告は、二人の報告者がこの数年共同で取り組んできたアラビア語学習の動機づけに関わる一連の研究の一部である。今回は、自発的なアラビア語学習という条件を得るため、外国語非専攻のアラビア語受講者を選んで行なわれた調査の報告であった。報告者によって開発されたアラビア語動機づけ尺度を用い、大学生 347 名を対象に行なわれた調査と分析の結果、動機における自己決定性が高ければ学習満足度も高いことが確かめられ、アラビア語教育への応用可能性が提唱された。こうした地道な研究が、日本のアラビア語学習環境の向上、ひいてはアラビア語やアラブ世界への関心の底上げにつながることを期待できる報告だった。（田浪亜央江）

## 企画セッション

### 1. A New Horizon of the Middle East Studies

変化する国際情勢のなか、新たな視点でアラブ地域を読み直すべく、各国の事例が報告された。

長沢栄治報告（The Future of the Post-Colonial Regimes in the Arab World）は、アラブ近現代史から概観し、転機となる事件とその時代を考察し、アラブ各国の現状打破に必要な左翼や宗教勢力など諸勢力の分析を行った。

宮田律報告（Upgrading Japan's Policy towards Iran）は、かつての日本の中東（イラン）エネルギー政策の独自性を評価し、対して近年の米追従を危惧し、対話に転じた現イラン政府との連携の必要性を論じた。

柿崎正樹報告（Specifying the Effect of Religiosity of Political Behavior）は、公正発展党以来のトルコの発展を分析し、イスラーム担った役割について、政治的イスラームや穏健イスラームといった既存の分析を超える新たな視点が必要であると指摘した。

水谷周（企画）報告（A New Balance in the Study of Islam）は、地域の現状をより正確に理解するための基礎的作業、宗教偏重がもたらすイスラーム理解への阻害、西欧人以外の視点によって諸課題を克服すべきことが言及された。

日本の対イラン政策、トルコとそれ以外での政治とイスラームの関係の相違、シリア問題に向けた地域的取り組みなど、具体的な懸案が質問で取り交わされた。時間に正確なセッション運営は、周到な事前準備を物語るものだった。

### 2. Examining Preventive Diplomacy in the Middle East from the Perspective of Area Studies

中村覚（企画）により、西側冷戦期から誕生した Preventive Diplomacy（PD）の紹介と、中東における実施状況について、解説と問題提起がなされ、次いでトルコ、レバノン・シリア、湾岸地域を事例とした報告が行われた。

今井宏平報告（Turkey's Preventive Diplomacy during the JDP Era）は、公正発展党の政策を例に、早くから欧側 PD に関わってきたトルコの姿勢が紹介された。

Saleh al-Mani 報告（Preventive Diplomacy in the Middle East）は、近年の「アラブの春」

による変化で、PD が高まりつつあるアラブ地区の官民、そして宗教界による対応が話題とされた。

末近浩太報告（“The Resistance Axis” and its Implication）は、イラン、シリア、ヒズボラ（レバノン）による「抵抗の軸」が、諸悪の根源とされながらも問題解決の糸口とも期待される、独自の政策が考察の対象とされた。

立山良司（コメント）は、懸案が集中する中東・アフリカ地域で、現実に共有可能な利害関係や価値観なども検討することで、武力衝突を回避できる PD が可能となるのではないかと解説した。

今井報告で指摘された、満足いく結果は生み出していないトルコの政策が質問にあった。政策そのものの実効性も今後は分析すべきではないか、という印象を抱いた。全報告者がフルペーパーで臨んだ、十分な準備のもとに企画されたセッションだった。

（阿久津正幸）

### 【大会を終えて】

昨年の4月ころ、日本中東学会前会長の臼杵陽先生から、東京国際大学において第30回年次大会の開催をお願いしたいと打診がありました際に、私は、実は、二つ返事でお引き受けしました。ところが、本学所属の中東学会員の先生方から「絶対に無理です」と大反対をされ、いったんは臼杵先生にお断りをするという羽目になりました。ところが、「このような立派な学会の開催を断るべきではない、大学全体で支援をするから、あなたが中心となって開催してください」と倉田信靖理事長・総長から命じられてしまい、何があっても開催しなければならないという状況となりました。いざとなれば、私一人でもなんとかしよう、と心に決めて、昨年の5月11日、大阪大学で開催された年次大会の懇親会で、次期開催校を代表して、挨拶に立ちました。

東京国際大学には、中東学会の会員が、名誉教授の宮治美江子先生を含めても常勤職で6名、非常勤1名、という少人数で、しかも、大御所的な会員は学部長・副学長の重責にあり、中堅どころの会員二人がサバティカルをとっているという最悪の条件下にありました。

そこで、私一人でもなんとかなる、と決意を固め、大阪大学や東洋大学といった過去の大会の足跡をお手本に、宮治美江子名誉教授に委員長を依頼して実行委員会を立ち上げ、少しずつ開催準備を始めました。しかし、思いがけないことに、そこから、まさに多くの方々の暖かいご支援とご協力を頂くことができました。まず、学会本部の栗田禎子会長や山口昭彦事務局長と学会事務局の皆様、メーリングリストやニューズレターを担当されている松本弘先生、ウェブ担当の北爪秀紀さんから、何度も適切なご指導をいただいたことは、闇の中に光明を見る思いでありました。大げさな表現かと思われるかもしれませんが、当時の私を取り巻く環境は、何をどのようにしたら、大会が開けるのか、まさに五里霧中の状況だったのです。

また、東京国際大学が6号館の全体を一括して、無料で提供してくれたことも、実行委員会にとっても参加者にとっても、出店された書店の方々にとっても、まとまりがよく大変に便利で、有難いことでした。大学側では、学外の行事には職員は出さな

い、という原則がありました。特例として国際交流課の職員、宮川純子が終始、私の手足となって働いてくれました。彼女の存在は、大会を成功に導く大きな鍵となりました。彼女のお陰で、面倒な郵便振替口座の開設と諸手続き、6号館の会場準備、看板やプラカードの手配から、懇親会の料理の選択や休憩室の飲み物などの用意まで、まことに順序良く、しっかりと整いました。また、本学の国際交流研究所と科学研究費基盤研究Aにかかわる研究員の平井貴幸、阿久津正幸と科研助手の中村憲司の3名は、発表申込者のリストや名札の作成、開催直前のOA機器の整備、当日のパソコンの調整、領収書の整理などまで、身を粉にして働いてくれました。

さらに、特筆したいことは、学生たちの活躍でした。担任を持たない私には、アルバイトを頼める学生は、私の授業を取っている修士課程の院生しか、おりません。彼らとは4月中旬に初めて出会ったばかりで、お互いに知り合って1か月もたっておりません。しかもアルバイト学生18人中、14人が留学生でした。さらに、彼らは通常は第2キャンパスで学んでおり、大会が開催されました第1キャンパスに慣れていていただけではありません。それでも、彼らは快くアルバイトに参加してくれ、誠実に礼儀正しく作業を手伝ってくれました。3月末にサバティカルから戻られた武石礼司会員のお弟子さんも3人、加わってくれて、全員で大活躍してくれました。アルバイト学生の仕事ぶりについては、最も心配をしていたことでしたが、結果として、彼らが最も大きな貢献をしてくれたことになりました。

もう一つ、付け加えさせていただきたいことがあります。それは、大会が近付いてくるにつれて、大会開催当日の詳細な手順について不安が出てきましたので、学会事務局に問い合わせたところ、2009年の広島大学の「進行予定・作業要領」の表が残っていたと、送ってきていただいたことです。これは非常に詳細な手順表で、2日間の進行予定表を作成するのに、大いに参考となりました。広島大会を主導された宇野昌樹先生にお礼を申し上げたところ、大変に驚かれていましたが、まさに大会進行の「救いの神」となりました。

このように振り返ってみますと、「私ひとりでも」と覚悟を決めて作業を始めましたが、宮治美江子委員長をはじめ、多くの方々の暖かいご協力とご支援によって日本中東学会第30回年次大会を、303名の参加という盛会で終えることができました。

第30回の記念大会としては不十分な点多々あったかと、申し訳なく存じますが、これで精一杯だったことも事実です。ご支援、ご協力をいただいたり、激励して下さったりした多くの皆様、川越市までいらして下さった皆様に、心から厚く感謝を申し上げます。

(第30回年次大会実行委員会事務局長：塩尻和子)

### 【大会決算報告】

収入		支出	
大会開催費(学会から)	400,000	会場使用料	0
大会参加費(事前1,000円×151人)	151,000	印刷代(プログラムと要旨集)	263,100
大会参加費(当日2,000円×120人)	240,000	振込用紙	950

懇親会費（事前 5,000 円×72 人）	360,000	文房具類	11,751
懇親会費（当日 6,000 円×29 人）	174,000	名札ケース	12,252
懇親会費（学生事前 3,000 円×13 人）	39,000	手提げバッグ	18,375
懇親会費（学生当日 4,000 円×16 人）	64,000	飲料・菓子類	9,032
弁当代（1,000 円×55 人）	55,000	学会案内郵送費、運搬費	121,960
無料参加者(一般市民、学生など計 32 人)	0	要旨集郵送費、振込手数料等	4,000
		託児室傷害保険（2 名分）	2,280
		懇親会費	450,000
		弁当代（会員及びスタッフ）	95,000
		講師交通費	20,000
		研究員等謝金	94,000
		研究員等宿泊費	32,400
		アルバイト学生謝金	224,900
（学会参加者総計 303 人）		学会へ返金	123,000
合計	1,483,000	合計	1,483,000

## 『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会よりご報告いたします。

### 1. 30-1 号編集状況

30-1 号に関しましては、編集・印刷を完了しました。すでにお手元に届いているかと思えます。

### 2. 30-2 号編集作業中

30-2 号に関しましては 6 月 1 日に投稿が締め切られました。投稿本数は 10 本で、論文が 8 本、研究ノートが 1 本、博士論文要旨が 1 本でした。近く編集会議を開催し、採否を決定します。刊行は来年 1 月の予定です。

### 3. 31-1 号 投稿募集中

31-1 号は 12 月 1 日締め切り予定です。投稿をご検討のかたはご注意ください。

また、AJAMES は常時、博士論文要旨の投稿を受けつけております。博士論文を執筆したかたはぜひ投稿をご検討いただければと思います。また、身近に博士論文を執筆したかたがいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

なお、AJAMES では、会員のみなさまの研究成果の幅広い広報を考慮し、欧文による投稿を推奨しております。論文・研究ノート・書評など、欧文による投稿をお待ちしております。その他、英文による特集の企画がありましたら、ぜひご投稿ください。

### 4. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒104-0054 東京都中央区勝どき 1-13-1 イヌイビル・カチドキ  
日本エネルギー経済研究所中東研究センター 保坂修司  
『日本中東学会年報』編集委員会気付  
E-mail: ajames-editor @james1985.org あるいは ajames-editor@tufs.ac.jp

(『日本中東学会年報』編集委員長 保坂 修司)

## 寄贈図書

### 【単行本】

後藤宣代・広原盛明・森岡孝二・池田清・中谷武雄・藤岡惇著『カタストロフイーの  
経済思想－震災・原発・フクシマ』昭和堂、2014年。  
国土地理協会編『学術研究助成報告集』公益財団法人国土地理協会、2014年。  
小杉泰著『9・11 以後のイスラーム政治』岩波書店、2014年。

### 【逐次刊行物】

『季刊アラブ』No.149、日本アラブ協会、2014年  
『地域研究』第14巻1号、2号、京都大学地域研究総合情報センター、2014年  
『日本クウェイト協会報』No.231 February2014、日本クウェイト協会、2014年  
『Sadāqah 日本サウディアラビア協会報』No.230、No.231、日本サウディアラビア協会、  
2014年  
*Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 77, Part 1, Cambridge University  
Press, 2014.

## 会員の異動

### 【新入会員】

堀尾 藍  
ハッガグ・ラナ  
沈 雨香  
高橋 信一郎  
Faris Shihab  
Alsayyed  
葉狩 真悠子  
是恒 香琳  
桑原 尚子  
児玉 恵美

木原 悠  
高松 郷子  
齋藤 秋生子  
瀬戸 邦弘  
タキダ モハマッ  
ド  
森山 拓也

【新入賛助会員】

独立行政法人  
石油天然ガス・金  
属鉱物資源機構

【所属先・連絡先の訂正・変更】

武藤 弘次  
藤波 伸嘉  
佐々木 紳  
岩坂 将充  
石田 友梨  
吉村 貴之  
山崎 和美  
溝淵 正季  
鎌田 由美子  
奥 美穂子  
松本 ますみ  
鹿島 正裕  
宮下 遼  
大塚 修  
中村 菜穂  
大稔 哲也  
今井 宏平  
濱崎 友絵

## 事務局より

今年も、年次大会を無事に終えることができました。運営にあられた宮治美江子委員長や塩尻和子事務局長をはじめとする大会実行委員会の諸先生方、ならびに開催校の関係の方々に厚く御礼申し上げます。

さて、日本中東学会はまもなく30周年を迎えますが、年々、学会の活動が多様化していることは毎年この時期のニューズレターに掲載される決算と予算をご覧いただければおわかりの通りです。たとえば、10年前の2004年6月21日発行の98号に掲載された2003年度決算と2004年度決算をあわせてちょうど1ページで収まっていた。その後、2ページとなり、決算と予算にそれぞれ1ページをあてていましたが、今年度はついに2ページにも収まりきらなくなりました。

今後とも、学会活動のいっそうの活発化にご協力をいただければと思います。

(山口 昭彦)

## 編集後記

今年も電子版とともに、年次大会報告を掲載した活字版ニューズレターをお届けする季節となりました。東京国際大学で開催された今年度の研究大会は大変盛況で、とても興味深い研究発表が並びました。ぜひ、報告文をお楽しみください。

そして、今年の研究大会はこれにとどまりません。8月にはトルコで開催される第4回中東研究世界大会(WOCMES4)に本学会から4つのパネルが参加し、12月には京都大学で第10回アジア中東学会連合(AFMA)大会が開催されます。前者の報告はニューズレター次号にて、後者の報告は次々号にて掲載予定です。

来年度には、同志社大学にて次期年次大会が開催されます。東京国際大学の大会実行委員会のみなさま、ありがとうございました。そして、同志社大学の大会実行委員会のみなさま、よろしく願いいたします。

(松本弘)

## 会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。納入済の年度がお分かりにならない場合は、事務局まで気軽にお尋ねください。AJAMES に未送付分がある場合は、2013 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非ともご協力いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

日本中東学会ニューズレター 第136号

発行日 2014年7月31日  
発行所 日本中東学会事務局  
印刷所 東洋出版印刷株式会社

### 日本中東学会事務局

〒150-8938  
東京都渋谷区広尾 4-3-1  
聖心女子大学  
山口昭彦研究室内  
日本中東学会事務局  
電話：03-3407-5685  
ファックス：03-3407-6492  
Eメール: [james@james1985.org](mailto:james@james1985.org)  
<http://www.james1985.org>  
郵便振替口座：00140-0-161096（日本中東学会）  
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店（普）5346808  
（日本中東学会 代表 栗田 禎子）